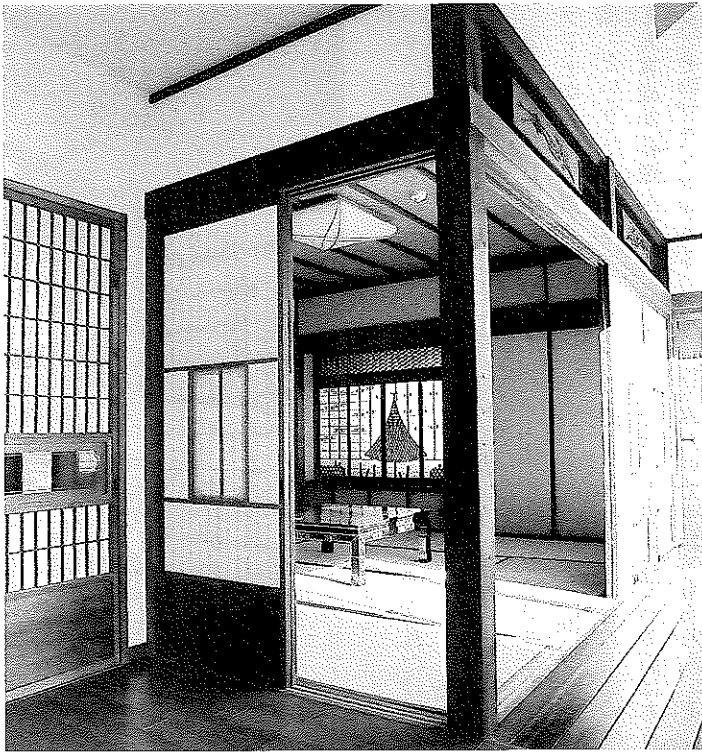


古い民家の廃材を リフォームに活用し、 環境や文化保護に貢献

古い民家をマンションの一室に移築したのは、古民家再生を唱えるNPOのエコ住宅リサイクルバンク。同社が提案する古材を使用したリフォームは住文化や環境保護を考慮した新しいリフォームの形だ。



年間一万户の 民家が解体

少子高齢化が進むにつれ、古い民家が續々と壊され失われているという。その数は年間一万户を超えるといわれているのだ。だが、そんな古民家の保存や再生を呼びかける運動も最近広がってきている。NPO法人のエコ住宅リサイクルバンク（横浜市）もその一つである。

自らリフォーム専門会社を経営している、代表の二藤忠さんという。
「私自身、多くの仕事を手がけてきたなかで、明治、大正、昭

和に建てられた家が解体され、処分されていく現場を目のあたりにしてきました。しかし、その廃材の一つひとつを見てみると大工や建具屋のすばらしい技術があるし、部材自体もいいものが使用されている。これが処分されていくのは、日本民家の伝統文化自体が捨てられていくのと同じです。ですから、このような現状を社会の多くの人に知ってもらい、どうにかして日本民家を残せないかという思いからNPO法人という形で活動を始めたのです」

また、民家解体にはもう一つの問題もある。建築廃材は全産業廃棄物の三割を占めるといわれているが、このような廃棄物処理問題をはじめ、新建材によるシックハウス症候群、木材の過剰伐採による山の荒廃など環境破壊につながっているのだ。
「私たちは日本家屋の文化継承とともに、国産木材のふるさとである山の再生や建築廃材の減少による環境保護のため、民家（住居）再生の方法を紹介し、その普及に努めているのです」

マンション空間に 民家の和室を再生

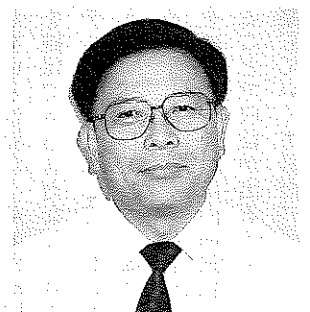
そこで、同社が提案しているのがリフォームという形だ。それも古い民家の廃材を使って行

うというものである。

「古材や家屋そのものを残そうと考えた場合、家全部を移築するのはなかなか難しい。それなら、民家の内部だけを新築の一戸建てやマンションの中に移築してもいいのではないかと、というのが一つの考えとしてありました。つまり、空間を再生するということです」

その考えを実現したケースが神奈川県横須賀市にある。昭和初期に建てられた築七〇年のTさんのお宅である。T邸は事情によりマンションに建て替えられることになったが、長年住み続けた家が姿を消すのは忍びない、家の思い出を残したいという家主の強い要望があった。そこで二藤さんに相談を持ちかけたのだ。

「一番いいのは家全体の移築ですが、そうすると都会では土地問題を考えると難しい。その代わりに和室一室など部分的にならマンションの部屋の中に再生できるということを提案しまし



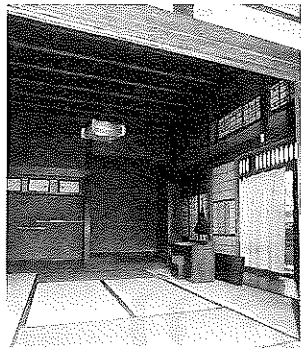
二藤忠さん

R 特集:夢の住まい/リフォーム・ブームを追う

た。Tさんのお宅はとても立派で、昔の日本文化の良さが詰まっている。これは残さないといけないと私自身も感じましたね」

最初はTさんも本当にそんなことができるのか不安げだったが、コミュニケーションをとりながら作業が進められていくなか、完成が近づくにつれてその不安が喜びに変わっていったという。

マンションは居抜きで入手、そこに和室を再現した。スペースの関係で一〇畳あった和室は八畳に削られたが、細部にいたるまで忠実に再現された。細かい投網模様に入った書院のガラス戸、鳳凰が彫られた欄間、柱もそのまま利用された。柱には昔の落書きが残ったまま。天井と畳以外は元の部屋の部材が使用されている。襖と障子を閉めればマンションの中とは思えないほど、元の部屋の雰囲気がある。



解体前の丁邸(数寄屋風民家)

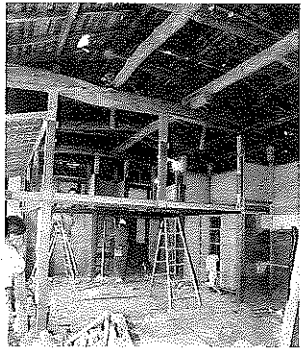
そのまま蘇る。費用は家屋の解体に五〇〇万円、施工が三五〇万円。工期は四五日で仕上げた。

「使用した古民家の部材と同じくらいのものを新しく揃えるためには、相当の費用がかかります。それくらい良い部材が使われていたのです。そういった伝統文化を継承することができたのはもちろんですが、それとともにTさんの昔の思い出を残せたことがうれしいですね」

和室だけでなく、長年親しんだ床板、引き戸などの建具、居間にあった暖炉などもリビングや玄関で再利用されている。トイレの戸も、そのままマンションのトイレに使用された。これにより、建築廃材も通常より大幅に減らすことができた。

古材や古民家をデータベースで管理

「もともと昔の日本家屋はリサイクル住宅だったんですよ。」

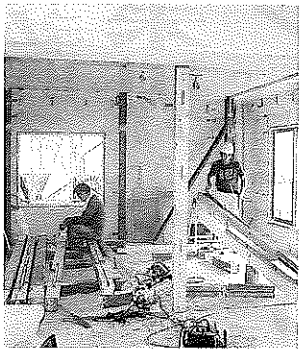


解体中

ところどころを修理しながら住んでいた。大黒柱の多くは仕口継ぎ手工法で補修された跡があったのです。それが、高度成長期に入り、消費は美徳という考えが一般的になり、住宅に関しても古くなれば新しく建て替えるという発想が普通になっていったのです」

日本の家は約二五年で解体される傾向にあるが、それは木造建築が約二五年で減価償却がゼロになり、建物の評価もほとんどなくなるからだという。ちなみに欧米の住宅の寿命は四五年から七五年といわれている。中古住宅の流通量をみても、欧米に比べ、日本はほとんど流通していない状態である。

だが、ここへ来て国土交通省は循環型住宅市場政策として、米国並みの「中古住宅」流通市場整備を進めている。民家も「スクラップアンドビルド」から「ス

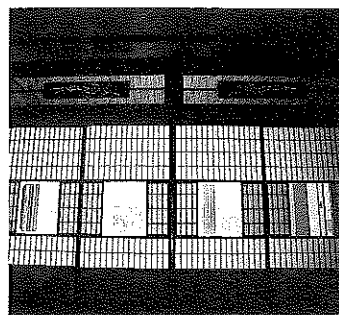
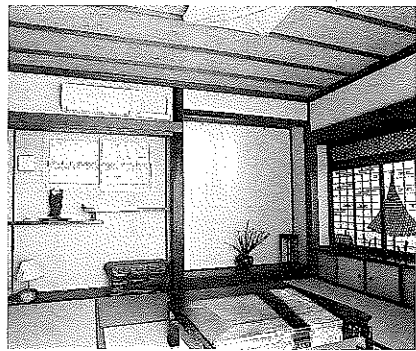


新築マンション内に再生

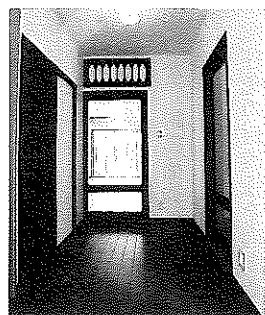
トック」の時代を迎えているのだ。

「再生させる手段としてリフォームを行うことは、住宅としての再評価を得ることができ、中古住宅流通の活性化につながります。また、リフォームの材料として、古材を使うことで廃材の量を減らすことができ、環境保護につながる。まさに一石二鳥なのです。古材の昔の味を生かすのもいいし、カンナをかけて新材として使用された古材と中古住宅をデータとして保管しておく。リフォーム住宅のカルテとすることで商品としての住宅流通を促進していくのが、今後の目標です」

現在、エコ住宅リサイクルバンクは、古民家や古材の情報を集め、提供者と利用者の橋渡しをするサービスを進めている。これを民家再生の足がかりとし



障子や戸なども再利用



て展開していく考えだ。

同社のホームページ (<http://www.eibv.jp/>)では、解体された古民家から引き取った柱などをはじめ、障子や板の間、欄間、和箆などの古材が掲載されている。また、古民家そのものの情報(会員のみ)も同様に扱っておりすでに多くの問い合わせがあるという。

「将来的には、古民家だけでなく、古い街並みを残していくような活動も考えています。それには行政、企業、市民などの協力が不可欠です。さまざまな機関と協働して住文化の保存・再生をめざしていきたいですね」

B